2024年4月 14 日 久宝教会 復活節第３主日礼拝メッセージ

「永遠に朽ちない神の言葉」　　水谷憲牧師

聖書　ペトロの手紙 Ⅰ　1章22−25節

本日は「ペトロの手紙第一」。キリスト・イエスの選ばれた使徒のうちの１人であるシモン・ペトロが書いたものかどうかについては、いくつか疑念があげられているので、疑わしいようですが、この手紙は、当時周囲の異教徒からさまざまな迫害を受けていたキリスト者たちを慰め、信仰を強く持ってくじけないように励ます目的で書かれたものであると言われています。当時キリスト教徒に加えられていた迫害というのは、すさまじいものだったようです。たとえば紀元64年にローマで大火事が起こり、狭い道路と木造建築の町は3日3晩燃え続けたといいます。それは、当時のローマ皇帝ネロが、ごちゃごちゃしたローマの町を新たにきれいに建て直すために、わざと、ひそかにローマの町を焼き払ったのではなかったかと言われています。そしてネロは、その疑いの目を自分からそらすために、当時すでに巷から「胡散臭い」「怪しい」と思われていたキリスト教という新興宗教の信者たちに濡れ衣を着せたわけです。その結果、莫大な数のキリスト教徒たちが、残虐に殺されたといいます。ある歴史家の記述によると、茨の冠どころか野生の動物の皮をキリスト教徒にかぶせて犬に生きたまま食いちぎらせたり、十字架上で釘づけにしたり、キリスト教徒をコールタールの上に転がして、まだ生きているのに火をつけ、夜の灯りとして、生きた松明として用いたとか、さすがに見ている者に同情の心さえ起こってくるほどだったと。そういう状況が背後にあったことを思いながらこの手紙を読むと、迫害によって恐怖と不安の中にある仲間たちを必死に励まそうとする著者の思いに、心が動かされます。

そして今日一緒に読んでいただいた1章22節にはこうあります。「あなたがたは、真理に従うことによって、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい」。この勧告の相手である「あなたがた」というのは、「真理に従うことによって、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから～」と書いてあるように、もうすでに真理に従うようになった者、魂を清めた者、偽りのない兄弟愛を抱くようになった者であるということが前提となって

います。そしてもちろんこの「あなたがた」というのは、現在の私たちをも意味するものとして、現在の私たちに対しても語られているという意味での「あなたがた」として、この勧告は読むことができるでしょう。しかしそれにしても、「真理に従う」「魂を清め」「偽りのない兄弟愛」とか、教会に集う私たちにとっても、これらの言葉は漠然としたイメージしか持てない言葉です。これらの言葉に限りませんが、もう少し分かりやすくならないか。真理に従うとはどういうことでしょうか。魂を清めるとはどういうことで、偽りのない兄弟愛というのはどういうものなのでしょうか。

「真理」という語を国語辞典で引いてみました。「正しい道理」「その物事に関して、例外なく当てはまり、それ以外には考えられないとされる知識・判断」とありましたが、むずかしいですね。ギリシャ語では「アレテイア」というので、それで調べてみると、「本当のこと・真実」とありました。これなら私でもなんとなく分かりそうな気がします。神様に関する「本当のこと」――それは神様が私たちのことをそのままでよしとされていること。特に弱い立場にある者や痛んでいる者にこそ、神様は恵みと力とを豊かにお与えになること。それはイエス・キリストがその生涯においてなされた働きからも分かります。「ルカ福音書」におけるマリアの賛歌にも、次のように歌われていました。「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」（１：５１）と。さらに、この「アレテイア」という言葉で表されている「本当のこと」とは、決して主観的なものではなく、客観的なものであるとされています。つまり、先ほどのような神様に関することは、決して私たちだけの独りよがりな思い込みや気のせいにとどまるものではなく、客観的な真実なのだということです。ですから、真理に従うということは、私たちみんなが神様によって愛され、力づけられ、慰められているのだということを、自分の主観的な思いだけでなく、客観的な真実として「そうだよね、私だけじゃないよね、あなたもみんなもそうですよねー」と確認し受け入れるということなのです。

「魂を清める」とはどういうことでしょうか。「魂」は「プシュケー」という言葉で、「心」とも訳せますし、ひとりの人間全体をさすと考えることもできます。いずれにせよ、神様の自分に対するかかわりと、そのかかわりのひとつの大きなしるしであ

るイエス・キリストの働きを通して、私の心もしくは私という存在がいやされ清められる体験をすることが、「魂を清める」ということなのではないでしょうか。イエス・キリストは、御自分を十字架につけて殺したユダヤ人たちの罪や、御自分を見捨てて逃げ去った弟子たちの罪を問うことなく、逆に御自分が十字架で犠牲になることによって、神様に対する彼らの罪の埋め合わせをされたのです。そしてそれと同様、イエスは本当にどうしようもない今のこの私たちのことをも愛してくださり、そのしょーもない罪の贖いをも引き受けて下さったのです。私たちの日常では、嘘をついたりすることがあったかも知れません。けんかをして誰かを傷つけたり悲しませたりしたことがあったかもしれません。人の悪口も言ってしまったりしたかもしれませんし、人を傷つけるような冗談を言ったりしたことがあったかもしれません。イエスが十字架に身を投げだされたのは、そんな欠けの多い、本当に程度の低い、しょーもない私たちの罪がゆるされるためでもあったのです。魂が清められるとは、このような私たちの罪がイエスの贖いによって清められ、罪悪感や劣等感に苦しむ私たちがいやされ解放される体験なのかもしれません。

そしてもうひとつ、「偽りのない兄弟愛」ですが、このように神様が私のことを愛し、その言葉やイエス・キリストの存在を通して恵みと力とをお与えになって下さっていることを、私自身が客観的な真実として受け入れ、またそうすることによって自分自身がいやされ清められる体験をした今、私たちはもはや口先だけの兄弟愛などではなく、イエス・キリストが身をもって証された兄弟愛を理解したはずだというわけです。偽りのない兄弟愛とは、自分の都合や計算によって左右されることのない、まさに神様やイエス・キリストの示されているような愛、つまり、決して見返りを求めることのない、無条件、無制限の愛のことなのです。そして手紙はこう続きます。「だから、清い心で深く愛し合いなさい」と。「あなたたちにはそうできるはずだ」と、この手紙の著者は私たちに励ましを与えています。「無条件、無制限の愛なんて非現実的だ。私たちは完全な者ではない、長所もあれば短所もある不完全な人間なのだから、できるはずがない、偽りのない兄弟愛を理解したからといってもそれを行いに表すのは難しい」などなどと、私たちは思ってしまいます。実際そうかもしれません。しかし、神様もイエス・キリストも、この手紙の著者を通して私たち

に希望を抱いているのです。そんな無条件・無制限の愛情なんて受けたことも感じたこともないのであればいざ知らず、そんな本当の愛を知り、体験した、そんな私たちであればこそ、それに倣うこと、受けた愛を隣人に注ぐことがきっとできるのではないか、できるはずだ、と希望を持っておられるのです。そしてその希望は、神様やキリストの示された私たちに対する深い愛と共に、聖書の中に豊かにたたえられています。それは、いつまでも決して変わることのないものであり、ここで「朽ちない種」と呼ばれています。どんなに時間が経とうと、時代が2000年過ぎようとも、私たちが聖書を開くと、神様は、イエス・キリストは、生き生きとした姿で私たちに働きかけ、みずみずしい言葉でいつも私たちに愛をもって語り掛け、教えてくださるのです。

自分にとっていつまでも色あせることのない、神の言葉、私たちも何か持っているのではないでしょうか。例えば…「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心していきなさい」（ルカ８:48）というキリストの派遣の言葉、「医者を必要とするのは健康な人ではなく病人である。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪びとを招いて悔い改めさせるためである」（ルカ5:31－32）といったキリストの招きの言葉、その他にも、「マルタ、マルタ、あなたは多くのことを思い煩っているが、必要なことは一つだけである」（ルカ10:41－42）というキリストの優しいねぎらいの言葉など…いろんな神の言葉、私たちそれぞれの心に深く突き刺さった言葉がきっとあると思います。それは、どれだけ時がたっても決して色あせ朽ちることのない種として、私たちの心にまかれているはずなんです。

神様の永遠に変わることのない、決して朽ちることのない御言葉を、私たちはこれからもいつもくりかえし聴きながら、あるいはいろんなところで新たに見つけ拾いながら、そこに秘められた深い愛と希望を改めて思い、願わくはその朽ちることのない神様の言葉を、私たちの隣人にも喜びをもって伝えていくことのできる者となっていきたいと思います。ネロの時代に限らず今でも、いろんな形で命や魂の危機にかかわるような、本当にしんどい試練の中に立たされている人がいることを思いますが、そんな隣人たちのためにも私たちが祈り、神の朽ちない言葉によって慰めと励まし、希望を分かち合っていく器となっていけたらと、私自身思っています。